

平安時代の文献における銀製器物

船 木 佳代子

1. はじめに

平安時代の工芸品のなかで、伝世品が少ないためにその全体像が理解しにくいものがあり、銀製器物はそのひとつである。特に平安時代前半の作と確認できるものは大変少ない。

現存する平安時代の銀製器物は、同時期の鑄造青銅器に比較すると器体も薄くて華奢なものが多い。それらは、銀の小塊や薄板から鍛造と切り抜きの技法で各部分を作って接合されるのが通例で、小さな鉾留めが付加されることもある。たとえば、春日若宮御料古神宝の銀鶴及び磯形^{註1}（国宝 春日大社所蔵）などはその代表であろう。鶴は二羽が磯形に向き合って立つ様態に、磯形は緩やかに屈曲する州浜形に作られている。州浜は、大和絵の水辺を表す線描と同じ様態であり、和歌の世界にも通じる趣向である。故実書^{註2}の一部にも、州浜に双鶴の銀器が箸臺として略図と共に記載されている例がある。銀製の小さな作品に当時盛行していた形式が具体的に表現されている、という点でも貴重な一具である。本品ならびに金鶴や銀樹枝など一連の飾り物は、摂関家の藤原氏が春日大社に若宮社殿を造営（1135年）後、奉納されたと伺う。その後、若宮御料古神宝として大切に保管されて現在に至る。

本稿では、伝世品の少ない銀器について文献の力を借りてわずかでも明らかにするために『延喜式』を採り上げた。全巻を通覧し、登場する銀器を掲出して考察を加えてみたい。

2. 『延喜式』について

『延喜式』は、延喜五年（905）、醍醐天皇の命により左大臣藤原時平を長として12名の官僚によって編纂が始まる。時平の死後は弟の忠平に引き継がれ、延長五年（927）十二月廿六日付けで完成の旨が忠平の名前で奏上されている。先学が説くように、平安時代の格式のうち内容の全体がほぼ伝えられているのはこの『延喜式』だけである。完成したのは延長五年であるが、序文に弘仁（810~823）と貞観（859~875）の年号を掲げ、その時代の制度を追従しようとする意思が表されているので、内容は平安時代前期以来踏襲されてきたものとして受け止められる。さらに『延喜式』施行（967）の前後から平安時代後期にかけての公家の日記や故実書にその内容が頻繁に引用されていることも注目される。例えば、宮中祭祀の調度と装束について様々な器物名が列記され、その用材と法量、時には制作技法まで記される場合がある。金属器や木漆器など、伝世品が少ない分野についてはこれらの記録から具体的な情報を得ることがあるので等閑にはできない。

3. 『延喜式』^{註3} 掲載の銀製器物

巻第一から最後の巻第五十までを順番に通覧し、原則として「銀」の文字を含む器物および、その用材と寸法を中心に抜き出して以下のように掲出した。銀器の用法や役割などを考察するために、金・銅・鉄または朱漆の器物などを部分的に選んだ場合もある。

また、下記①の〔大祓〕など〔 〕で括った文字は、国史大系本の頭注を用いた。

- ① 巻第一 神祇一 四時祭上〔大祓〕六月晦日大祓（中略）金銀塗人像各二枚。（下略）
- ② 《同上》 四時祭上〔御贖〕鉄人像二枚。（下略）
- ③ 《同上》 四時祭上〔中宮御贖〕鉄人像二枚。（下略）
- ④ 巻第二 神祇二 四時祭下〔晦御贖〕毎月晦日御贖 中宮。東宮准此。六月。十二月不在此例。金人像。銀人像各卅二枚。東宮各八枚。（下略）

以上①から④では、晦日の大祓に贖として人像が奉納されており、その枚数と材質が鉄であることがわかる。金銀塗の技法については、人像を制作するのは木工寮の職掌になるので、巻第三十四木工寮の記述（2526）を紹介してから考察したい。

古代社会では、お祓いの際に金属や木の薄板で人像すなわち人の形代を作り、それに穢れを移して水に流すまたは土中に埋めるということが行われた。平城京跡からは、多量の木製人像と少量の銅製人像が出土している。平安時代には、陰陽道を背景に呪術的要素も加わり、各月晦日にお祓いが行われ人像を必要とした。臨時の祭祀（67など）にも不可欠であった。

- ⑤ 巻第三 神祇三 臨時祭〔鎮新宮〕鎮新宮地祭 金。銀各五両。銅。鉄各五十斤（下略）

新宮の地鎮祭に際して、金と銀は5両ずつ、銅と鉄は50斤ずつが奉納されている。興福寺金堂鎮壇具（国宝）のなかに、金銅盤・金銅鉢・銀盤・銀鉢などの品々とともに廷金と銀鉦が含まれているのは有名である。鎮壇具ではないが、春日大社の本宮御料古神宝類にも金幣と銀幣があり、銀幣は鍛造してほぼ長方形の薄板状に調えられている^{註4}。

ところで、平安時代の重量単位は、唐令に依拠する大宝令の規定が踏襲され1斤を16両とした。また、貴金属については斤の三倍重量を表す大斤という単位を用いた。正倉院の銀器には、制作後にその器物の背面などに重量を線刻した鉢・壺・盤などがあって、現在の重量と線刻された重量とを比例計算すると大1斤は約670gになるという^{註5}。また、平城京からは銅製の分銅が出土し、現在の重量が329gであることから半斤（大1斤の半量）の分銅と推定されている^{註6}。奈良時代の大1斤はこれらを参考にしてある程度推定されるが、平安時代の大1斤は、重量記名の銀器が無いので計量して数値を導き出すことはできない。本稿で

は、仮に大1斤を600gとして試算するが、暫定措置にすぎない。

この地鎮祭で奉納された5両の金又は銀は、大1斤を600gとして各々187.5g、50斤の銅又は鉄が各々30kgと試算される。金銀の重量から想定すれば、上述のような薄板状態の幣として奉納された可能性があろう。

⑥ 卷第三 神祇三 臨時祭〔八十嶋〕八十嶋神祭（中略）金銀人像各八十枚。金塗鈴八十口。

⑦ 《同上》〔東宮八十嶋祭〕東宮八十嶋祭（中略）金銀人像各卅枚。金塗鈴卅口。（下略）

⑥の祭主は中宮、⑦は東宮、金銀人像の数は多い。金銀人像の制作技法については、①と同様の観点から木工寮の記述（②⑤⑥）を紹介してから考察したい。

⑧ 卷第四 神祇四 伊勢太神宮 神宝廿一種 金銅多多利二基。高各一尺一寸六分（中略）金銅麻笥二合。口径各三寸六分（中略）金銅賀世比二枚。長各九寸六分（中略）金銅鑄二枚。莖長各九寸三分（中略）銀銅多多利一基。高各一尺一寸六分（中略）銀銅麻笥一合。口径各三寸六分（中略）銀銅賀世比一枚。長各九寸六分（中略）銀銅鑄一枚。莖長各九寸三分。（下略）

伊勢太神宮の神宝廿一種の冒頭には、紡績用具の多多利（たたり）、麻笥（おけ）、賀世比（かせひ）、鑄（つみ）の4種類が掲げられ、金銅二基に対して銀銅一基、両者は同寸である。

平成四年（1992）の第61回式年遷宮に際しては、数々の社殿および装束と神宝が新調され、それまでの神宝が古神宝として保存された。同時期に神宮徴古館で開催された展覧会^{註7}では、平成四年（1992）に調進された金銅多多利・銀銅多多利、金銅麻笥・銀銅麻笥、金銅賀世比・銀銅賀世比、金銅鑄・銀銅鑄について各一基ずつが展示された。これらの器物の寸法^{註7}と上掲の『延喜式』記載の寸法とは、一尺を30cmとして計算するとほぼ等しい。また、室町時代の寛正三年（1462）の遷宮に調進された金銅多多利一基も展示されており、両者の形状は全く同じ、寸法はわずかに小さいが、式年遷宮の際に形状が守られてきた一例と言える。明治四十二年（1909）に調進された紡績具4種類も展示されていた。こちらは、木製に金箔置または銀箔置である。多多利以外の3種類の形状はほぼ一致している。

神宝廿一種の最後には熟銅を筆頭に半熟銅・減金・金・銀・銀箔・白藤・鉄などの金属類が列記されている。神宝制作のための原材料の詳細が伝わり興味深い。減金とは字義を尊重すれば金が（水銀に）減している状態の金アマルガムを意味するので、金銅とは銅鍍金の謂いである。銀箔は箔押し用、銀は展性が高く薄い箔にしやすいため肯ける。銅には鍍銀しにくく、平安時代の銅胎の仏具のなかには鍍金の上に鍍銀をした作例^{註8}もある。古神宝ならではの特殊な銀箔押し又は銀箔を用いた鍍銀の技法があったのかもしれない。

⑨ 卷第五 神祇五 齋宮〔装束〕初齋院装束 銀飯笥一合。銀水鏡一合。銀盞一具。銀鍋子一口。銀匕四枚（下略）

齋宮とは、天皇が自身の代わりに伊勢太神宮の祭祀を行うために齋王を派遣する宮であ

る。斎王は、伊勢へ赴く前に宮中の初齋院で潔斎をする。初齋院の飯筥以下食膳具は全て銀と記載されている。鍋子は温酒用であろうか。これら銀器の直前には、白絹、緋束絶、両面、白綾、白木斗帳などが列記され、他の祭祀と比べると白と銀という色名が多い。

鉦の文字は、当時「かなまり」と訓まれた。『延喜式』は、椀と鉦とを使い分けており、金属製を鉦と表記している。正倉院宝物の佐波理鉦は、鑄造後轆轤挽きの技法で胴下半に円みで作られている。外底には高台の有るのと無いのとがあり、高台の有るものは蓋を伴う。平安時代の鉦もこれらの形式を踏襲し、祭祀や儀式に応じて銀と白銅との使い分けをしたのであろう。銀鉦と銀飯筥の制作技法については後述(⑬)したい。

⑩ 《同上》齋宮 年料供物 銀盞一合。銀鉦一合。銀匕四枚。銀鍋子一口(下略)

⑪ 《同上》齋宮 造備雑物 銀飯筥一合。銀酒盞一具。銀鍋子一口。銀水鉦一合。銀匕一枚(中略) 臈小一斤。白臈大四両。練金小十一両一分二銖。銀大五斤十一両。水銀小五斤三両(中略) 金薄冊枚。熟銅大五十七斤七両。半熟銅十八斤。鉄五十一斤四両(下略)

斎王は初齋院の次に野々宮へと遷って潔斎するが、その祭祀器具を⑩では年料供物として、⑪では造備雑物として掲出している。食膳具の内容は前出⑨とほぼ同様である。

原材料の記述中、「臈」は「鑑」の異体字で錫を意味する。「白鑑」には、錫、或いは錫と鉛との合金すなわちハンダの意味もあるので、銀器や白銅器にはハンダ付けによる加工が有り得た証左と解される。先述したように(⑨)、鉦の高台を本体とは別造りして接合する際にはハンダが必要となろう。銀酒盞や銀水碗などには高台が付けられていた可能性が高い。

⑫ 《同上》齋宮 [三年潔斎](中略) 但金銀器及釜甕之類。納斎王家(下略)

斎王が三年間の潔斎を終えて伊勢太神宮へ赴く際に、金銀器と釜甕などは斎王の家に納めると言う。金銀器とは、巻五の用語の内容から判断すると、金あるいは銀で加飾した鉄製や銅製の器具を意味するのであろう。

⑬ 巻第六 神祇六 齋院司 膳器[雑器] 銀飯鉦一合。銀箸三具。銀盞一合。銀匕二柄。銀箸臺二口。銀水鉦一口。銀唾壺一口。銀盤二口。白銅酒壺一合。白銅杓一柄。加白銅盤。白銅風炉一具。白銅火炉一具(下略)

賀茂齋院の祭祀用器を列記した部分である。銀唾壺は初見である。室内の棚に置く調度のひとつ、貴人が口中を漱ぐ際に使用する。⑭で再登場するので後述したい。

酒壺などの白銅とは、銅と錫の合金であり現代の白銅とは異なる。錫の割合が多いと白味勝ちになるもので、正倉院文書にも「白銅」の文字が記載され、白銅の実物も伝わる。

⑭ 巻第十 神祇十 神名下(中略) 銀山上神社(中略) 銀山神社。

神祇十には神祇九に続いて、律令体制下の各地に置かれた神社の名前が列記されており、

その最後、対馬嶋廿九座のなかに銀山上神社と銀山神社の名前が載る。この部分だけでは、対馬が銀を産出したのかどうか不明であるが、巻第二十四主計上^⑭には「対馬嶋（中略）調銀」と明記されているので、対馬には産銀があるので調として課税しこれらの神社を置いたと理解される。なお、現在は、長崎県対馬市厳原町に銀山上神社と銀山神社の二社が少し離れて位置している。その来歴は詳らかではないが、祭神は地祇神と諸黒神と伝える。

- ⑮ 卷第十三 図書寮〔行幸従駕〕凡行幸従駕御研案一具。研一口。筆十管。銀小瓶一口。墨四廷。雑色紙数不定。（下略）

図書寮は中務省配下で、主に蔵書類の管理および紙・墨・筆など文房具の製造を行う。この部分では、天皇行幸の際に研案一具すなわち硯以下の文房具一揃いを用意すると言う。銀小瓶は水滴の役目をする。古式の硯箱には、金属製の瓶形状の水滴が仕込まれていることがある。金銅製の簡素なものや銅製鍍金銀で装飾文を加えたものがあり、形も壺形以外に、弦と細い注口を付けたヤカン形式のものなどが平安時代以降制作されている。ここでは小瓶ということ以外わからないが、小器に銀が用いられていることを記憶に留めたい。本稿では、「金銀装腰帶」とか「金銀装横刀」（巻第十二中務省など）のように、装飾部分の銀については採録しなかったが、少なからず記載されていた。

- ⑯ 卷第十五 内蔵寮〔毎月晦日〕凡毎月御贖（中略）中宮。東宮並同。金人。銀人・十六枚。

内蔵寮の職掌は皇室の財産管理である。中宮並びに東宮の毎月晦日の御贖に必要な人像は、前述④の神祇二のなかに、「金人像。銀人像各卅二枚。東宮各八枚。」と記されていた。中宮の場合は、この中の半数 16 枚を内蔵寮が管理していたということになる。

人像は、後世の発掘品を見る限り木製・銅製・紙製のものは土中で傷んでおり、祓いの後に回収されるということはない。金銀人像の場合は、内蔵寮の役目上、財産管理という意味で回収、保管していたのかもしれない。なお、器物制作・保存管理・祭祀の準備を担う役所は別々なので、人像のように同一の器物が重複して記載される場合がある。

- ⑰ 《同上》〔諸国供進〕諸国年料供進（中略）銀大廿四斤十五両。調十八斤十一両。交易六斤四両。朱砂一千両（中略）右太宰府所進（中略）砂金百五十両。下野國所進。水銀小四百斤。伊勢國所進（下略）

諸国から 1 年間に供進される特産物のうち、内蔵寮が管理する分を列記している。銀は大廿四斤十五両（約 15kg）と定められ、その約 75% に当たる十八斤十一両（約 10.2kg）は調、約 25% に当たる六斤四両（約 4.8kg）は交易分から納められていることがわかる。銀は太宰府経由で、砂金は下野國、水銀は伊勢國から送られてくるようである。水銀小四百斤（約 80kg）は水銀を採取する前の鉱石、辰砂を指す。朱の原料として、あるいは鍍金銀に必用なアマルガムを作る際に必要であった。

- ⑮ 卷第十七 内匠寮〔武徳神泉〕凡五月五日節（中略）銀器 御飯筥一合 径六寸。深一寸七分。料。銀大二斤八両。炭一石二斗。和炭二石。油三合五勺。長功日十六人。火工五人。轆轤工四人。磨三人。夫四人。中功日十九人 工十四人。夫五人。短工日廿二人。工十六人。夫六人。酒壺一合受一斗五升。銀大七斤八両。炭二石。和炭七斛五斗。油八合六勺、長功卅四人。火工十二人。轆轤工六人。磨四人。夫十二人。中功卅九人 工廿六人。夫十三人。短工卅三人。工廿九人。夫十四人。杓一柄 莖長一尺七寸 受三合料。銀大十両。（中略）酒臺一口高六寸三分 廣六寸料。銀大一斤四両。（中略）蓋一口 受三合 加蓋盤料。銀大一斤。（中略）水鉢一口 径六寸五分 深一寸五分料。銀大一斤二両。長功日九人。火工二人半。轆轤三人半。磨二人。夫二人。（中略）盤一口径七寸五分料。銀大十四両（下略）

内匠寮の主な職掌は、儀式と節会に用いる装束と調度の制作である。平安時代も時期に拠って多少の変遷をみるが、その前半は、摂関家が権力を大にする後半よりも天皇家に拠る儀式が盛大に行われたので、『延喜式』においてその用具を知るのは適切であろう。

この条では、五月五日に武徳殿および神泉苑で節会が行われ、その際に用いる銀器を筆頭に、漆器や朱漆器の名称等が列記されている。名称に続いて寸法と原材料、さらに炭などの燃料や工人の内訳についても具体的に数値が記されており注目される。内匠寮の職掌上、ここに明記する必要があった。器種は、御飯筥・酒壺・杓・酒臺・蓋・水鉢・盤の7件である。御飯筥の寸法は、径18cm、深5.1cm、重量は1500gと試算した。寸法の割に銀量が多い。薄胎になりがちな鍛造ではなく鑄造するために多めに見積もったのかもしれない。御飯筥の工人は長功日十六人。この内訳は、火工五人が鑄造、轆轤工四人が鑄造後の器面の削り、磨三人が磨いて光沢を出すという役目と考えられる。その下役を夫四人が担い、加えて中功日十九人と短功日廿二人とが計上されている。

⑨で保留していた銀鉢の制作技法については、工人の配置と役割（火工・轆轤工・磨）や原材料がこの御飯筥と同様なので、鑄造・研磨に拠るものと考えられる。

次に、この7種類の器の重量について1斤を600gとして試算する。

- ・御飯筥 銀大二斤八両（1500g）・酒壺 銀大七斤八両（4500g）・杓 銀大十両（375g）
- ・酒臺 銀大一斤四両（750g）・蓋 銀大一斤（600g）（蓋と盤を伴い、容量は三合）
- ・水鉢 銀大一斤二両（675g）・盤 銀大十四両（525g）

以上7器に要する銀の合計は14斤14両で8925gと試算される。

蓋は「三合を受ける」とあり、大宝令が通用していたとして1合を約60ccとすれば蓋の容量は約180ccと試算される。水鉢よりは少し小さい。

銀器に続いては、漆供御雑器と朱漆器の食膳具名の多数が連なる。この五月五日の節会に際しては、武徳殿に御座壇を設営しているので天皇出御があり、饗応の段において天皇には銀器を使用したのではなかろうか。朱漆器は、大小の臺盤をはじめ数々の器種を掲げているので、参列した臣下も加えて饗応の用具であろう。銀器のみに「水鉢」があり、朱漆器のみに「羹椀」があるのは、冷たい水の容器として適した銀製鉢と温かい汁物に適した木漆製椀ということであろう。

⑲ 卷第十七 内匠寮 伊勢初齋院装束 白木斗帳一具（中略）銀飯筥一合。銀水鉢一合。銀盞一具。銀鍋子一口料。銀冊両。熟銅大一斤十両。減金小三両。信濃布一丈。炭一石。和炭二石五斗。单功十二人。本銀匕四枚料。銀廿四両（下略）

⑳ 《同上》賀茂初齋并野宮装束 斗帳二具。（中略）銀棒壺二口。加平文柄并支支部。（中略）銀飯筥一合。銀水鉢一合。銀盞二口。銀箸三具。各長八寸四分。料。銀小十二両（中略）銀匕二柄料。銀小十八両。銀箸臺二口料。銀小冊八両。銀唾壺一口。口径八寸五分。銀小七十八両（中略）鐵半廷（中略）白銅酒壺一合。受一斗。料。白銅大廿斤。油三合。鐵三廷（中略）白銅杓（中略）白銅風炉（中略）白銅火炉（中略）白銅箸（中略）白銅匕（下略）

伊勢への齋王⑲と賀茂への齋王⑳が潔斎の間、その祭祀の為に内匠寮が作成する用具が示されている。斗帳一具を筆頭に室内用具と金装車一具などが列記される。車の付属品である銀棒壺は「平文を加える」と注記があるので平文の部分が銀製と解した。銀の薄板を切り抜いて文様を作り木漆器の箱表などに貼り付ける平文はわずかながら古神宝に作例を見る。その後の一連の銀器が並ぶが、銀唾壺は、先述⑬（神祇六）と同一のものである。

唾壺は、唐時代の銀器や宋磁に作例が多い。来歴はわからないが、平安時代に貴族の室内調度が定型化するとともに棚に唾壺を置くことが慣行となった。現在の京都御所・清涼殿朝餉の間では二階棚に唾壺を置いて復元を試みている。江戸時代の復元で銀製もあると伺う。

さて、この唾壺の場合、重量を銀大ではなくて銀小で表記しているのは珍しい。小七十八両は大一斤十両とも表記可能である。975gと試算される。銀箸三具の小十二両は150g、一具は約50g、長さは25.2cmと試算すれば妥当な重さ加減である。

白銅酒壺は容量が一斗、白銅大廿斤は12kg、酒と壺とでかなりの重量となろう。鉄三廷は、卷二十四 主計上㉓に三斤五両を鐵一廷と為すと記しているので一廷は約1.988kg、三廷は約5.964kgと試算される。壺の脚部のみを鉄で作るのかもしれない。酒壺12kgと酒一斗（前述の⑱と同様、約6000ccと試算）との重量を支える脚部には鉄材が相応しい。

㉑ 卷第二十三 民部下〔諸国年料雑物〕年料別貢雑物（中略）太宰府 銀八百九十・両。

民部省が管轄する年料には諸国の特産物が連なるが、太宰府に対してだけは銀が筆頭に掲げられている。八百九十・両を890両と想定すれば、33.375kgと試算される。

㉒ 《同上》（中略）交易雑物 太宰府 絹四千疋（中略）銀三百両（下略）

太宰府所管の交易雑物には絹織物が多い。銀はこの太宰府の箇所だけに見える。銀三百両は11.250kgと試算され、㉑の年料とを合計すると44.625kgとなる。

㉓ 卷第二十四 主計上 諸国調（中略）銀一分。鐵二廷。三斤五両為廷。（下略）

主計寮は民部省配下で、税収の計算と監査、特に庸調について担当する。この巻頭には畿内に始まり諸国への調の項目が続く。その種類は、海産物、農産物、染織品など多岐にわた

る。金属類は少なく、銀はこの部分だけである。この銀と鉄とは、羅や綾を筆頭に多数の染織品名が掲げられた直後に記されている。銀一分を一両＝四分で試算すれば、9.375g となる。少量なので、染織品の一部分としてこの位置に記載されたのではないだろうか。

本稿では銀製器物のみを対象にしたが、平安時代の美術工芸には、銅に鍍金銀を施した仏具や銀箔の小片を散らした装飾料紙、銀鈔を蒔絵した塗漆の箱などが多く認められる。また『延喜式』全編には、金装・銀装の太刀とか、塗銀鈴とかの表記が散見されるので銀が加飾に必要な役割を担っていたことが窺える。この銀一分についても同様であろう。

②④ 《同上》主計上 対馬嶋 調。銀

主計局の役目上は調銀の重量を記すべきなのに記していない。平安時代の文献には、対馬嶋の銀坑道が悪天候で埋没したり、刀伊の入寇で大打撃を受けていたことが散見されるので産銀が極めて不安定であったことがわかる。調の一定量は決定できないのである。

②⑤ 卷第三十四 木工寮（前略）金装太多利一基。基方二寸（中略）料。鐵八両。金薄三枚。長功一人半。中功三人。短功四人。金装麻笥一口。径深各四寸。料。鐵十二両。金薄十枚。（中略）金装加世比一枚。柄長一尺（中略）料。鐵一斤。金薄七枚（中略）御贖料 金銀人像一枚長一尺。廣一寸。料。鐵四両。金薄。銀薄各三枚。長功工一人（中略）木人像。長八寸。廣八分。其面飭以金銀。長功七十枚。（中略）鐵偶人卅六枚。押金銀薄各十六枚。無飭四枚（中略）。木偶人廿四枚（中略）右毎月晦日御贖料。中宮亦同。東宮押金銀薄。鐵偶人各八枚。（下略）

木工寮は、宮内省の配下で、木材の調達および宮殿などの造営とそれに関わる器物の制作など多岐にわたる職掌を担う。鉄釘などの建築部品も相当量を扱い、時には祭祀用具の制作も担当した。大勢の鐵工が配置されている。この金装太多利などの紡織の3器は伊勢太神宮の祭祀用である。金装太多利一器に要する鐵八両（300g と試算）を鑄造後に金薄三枚で箔押しをしたと推定される。鉄の表面全体に金薄を押すためには鑄造後に丁寧に研磨する必要がある。鉄は銅や銀よりも硬いので技術と手数も要する。鉄の扱いに長けた鐵工がいる木工寮ならではの役目である。金銀人像が毎月晦日御贖料とされていたことはすでに（①④）見たが、寸法と材質の記載があるのはこの木工寮だけで、鉄製1枚（長・約30cm、廣・約3cmと試算）の人像に金薄と銀薄各3枚を用いていることがわかる。鐵偶人36枚のうちには、押金が16枚、押銀16枚、金銀の飭り無しが4枚という。偶人と人像という表記の違いは初出である。木偶人は金銀の飭り無しで合計180枚を数える。表記上、金銀人像は鉄製に金と銀の箔押し、鉄偶人は鉄製金箔押または鉄製銀箔押と区別している。太多利などの紡織器具について銅製の記述が無いのは不思議である。銀銅についても記述がない。

②⑥ 《同上》木工寮 年料（中略）鐵百廿四廷二斤。熟銅四斤八両二分三銖。作大祓刀料。（中略）練金一両。銀一両。水銀一両。御贖鐵人像料。金薄千四百冊枚。銀薄千四百冊枚。（下略）木工寮に充当される1年分の原材料を列記している。年料の鐵124廷2斤は、一廷を三斤

五両として(23)試算すると247.650kgとなる。鍊金、銀、水銀が各一両とあるのはアマルガムの技法で銅製の太刀の鞘に鍍金銀を施したと解される。

金薄と銀薄各1440枚全部が鐵人像に箔押しされたのであればかなりの枚数になろう。

- ②⑦ 卷第三十七 典藥寮 元日御藥 白散一剂(中略)度嶂散一剂(中略)屠蘇一剂(中略)銀盞一合。銀盤一口。白銅鉢一合。白銅盞子四合。(下略)

元日に白散、度嶂散、屠蘇という薬材を温酒にひたして服用することは、平安時代の文献にしばしば見る。宮中では、典藥寮が年末から準備し銀盞や白銅鉢にに入れて供することが慣例になっている。銀はある種の物質に会うと変色するという。元日御薬には適役である。銀盞は銀盤を伴って天皇に、白銅鉢と白銅盞子は列席者に用いたものと解される。

- ②⑧ 卷第四十 造酒司 諸節供御酒器 中宮准此。銀盞一合。金銅酒海一合。金銅杓一柄(中略)白銅風炉一具(中略)諸節雜給酒器。四尺臺盤三面。朱漆酒海三口。朱漆碗四口(中略)金銀杓三柄(中略)鐵火炉三口。右五位以上料。其日正給空盞(中略)四尺臺盤一面。朱漆酒海一口(中略)銀盞一枚。加盤。瓷盞二口(中略)右内命婦以上料。並請内蔵寮。事畢返上。

諸節供の酒器のうち盞だけが銀製である。金銀杓とは金銀人像の用語(25)と同様に金銀箔押しを施した鉄または銅製の可能性が高い。

- ②⑨ 卷第四十九 兵庫寮[太刀横刀] 凡二季太刀横刀八口。金装二口。烏装六口。其料鐵廿四斤。口別三斤。熟銅四斤。鍊金一分。銀一両。水銀一両(下略)

兵庫寮制作の太刀に用いる横刀八口について、その原材料の量などが記されている。八口の主材料、鐵廿四斤は約14.4kg、刀身一口の平均重量は1.8kgと試算される。水銀一両は約37.5g、銅の金具などに金銀をメッキする時に用いたものと判断した。熟銅・鍊金・銀・水銀の重量は23でも述べたが、金装太刀や銀装太刀を想起させる数値である。

『延喜式』における銀製器物の掲出箇所の抄出は以上である。

4. まとめと問題点

『延喜式』の記述において、伊勢神宮や賀茂大神および宮中祭祀の器物には銀器が多い。大半は供献用の食膳具と紡績具であり、器具の数および寸法や銀の重量、一部には工人数とその役割などが記されていた。紡績具の一部ではあるが、式年遷宮に因んだ新旧の同じ形式の器物を比べるとほとんど変化がなく、前例を尊重していたことが如実に伝わってくる。当時の政務においては祭祀の執行を先決とした以上、その器物の形式を重量と寸法などを基本として定式化する必要があった。『延喜式』はそのための記録でもある。

銀器制作の技法については、銀鑄造の工程を示す記載はあるが、鑿彫りの語は見出せない。しかし鑿彫りによる線刻文は平安時代の金銅や銀製の器物、その影響を受けた緑釉陶器の作

例に照らして存続していたことは明らかなので、祭祀用には無文が志向されたと解釈した。鍛造の話はなかったが、銀薄は多数が記載され加飾に使用している。平文にも銀薄を用いている。鍛造・切削・熔接・鉋止めを駆使した銀器の記述はなかったが、鍛造して薄板を作る技法は有り得た。木工寮の熟練鐵工ならば、銀という素材に慣れれば可能である。

銀銅とは、銅鍍金を意味する金銅と同様に、用語上は銅鍍銀と解釈するべきであるが決定できない。金のようにアマルガムを作成したということが読み取れないからである。巻第十七内匠寮に大笠料として「熟銅大十二両。減金小一両二分。鑑銀三分二銖。水銀三分。…」と言う記述があり、減金と鑑銀とを用語上同等に読むならば、金とは異なる方法で銅に銀を載せていたのかもしれない。類似の記述は車榻料にも見える。この「鑑銀」という語については今後、銀銅の神宝に関わる研究成果を待ち、それをふまえてから考察してみたい。文献の記述を先行させて銀器を解釈するのは工芸品として理解不足に陥るのは言うまでもない。

延喜式の銀器または銀に関する記述には、用語使いに徹底が見られないこともあった。「金銀人像」という用語はその象徴である。「塗」の具体的な技法については、本体が金属なのか木質なのか決定し難いために考察を進めることができなかった。用語上の問題点の整理を図るためにはある種の校合作業が必要であろう。一次史料のなかから善本を選んで、丁寧に読解する以外にはなさそうである。並行して実物の観察を重ね、当時の用語の有り方を理解することも欠かせない。

[註]

1. 『蓬萊山一鶴・亀・松一』平成10年和泉市久保惣記念美術館特別展図録所収
2. 『厨事類記』・『類聚雜要抄』（『古事類苑』・『群書類従』所収）など。
3. 『延喜式』は、『改訂増補国史大系 延喜式』（吉川弘文館 昭和47年発行）を用いた。
4. 平成30年に奈良国立博物館で開催された展覧会『国宝 春日大社のすべて』で展示ケースのガラス越しに目視観察。銀幣の厚みは傍の金幣よりも薄く、場所によっては1mm前後であろうか。
5. 『正倉院展』奈良国立博物館図録 平成4・27・29年など。
6. 『平城京展』京都国立博物館展覧会図録 平成元年
7. 『第61回神宮式年遷宮記念 御神宝特別展』神宮徴古館展覧会図録 平成5年
8. 金銀鍍宝相華唐草文経箱（国宝・延暦寺）など。

[参考文献]

1. 『改訂増補国史大系 續日本紀』昭和47年 吉川弘文館
2. 『改訂増補国史大系 續日本後紀』昭和47年 吉川弘文館
3. 『改訂増補国史大系 三代実録』昭和47年 吉川弘文館
4. 『増補史料大成 小右記』昭和40年 臨川書店
5. 『古事類苑 器用部』昭和54年 吉川弘文館
6. 『国史大辞典』平成9年 吉川弘文館
7. 虎尾俊哉『延喜式』昭和40年 吉川弘文館